



TITLE:

京大広報 No. 561

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 561. 京大広報 2001, 561: 1131-1142

ISSUE DATE:

2001-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196545>

RIGHT:



京大広報

No. 561

2001.10

目次

大学の動き

全学シンポジウム

- 「京都大学における教育評価（授業評価・成績評価等）の在り方」の開催.....1132
『京都大学百年史』刊行事業の終了.....1132

部局の動き

- 国際融合創造センターオフィス開設.....1133

訃報

日誌

文化交流

留学大国アメリカ

- 大学職員としての体験 - 大嶋三奈子...1136

随想

- 京大と音楽 名誉教授 鳴原 眞一...1137

洛書

- 後から参加した者の言い分 辻 文三...1138

公開講座

エネルギー科学研究科公開講座

21世紀のエネルギー科学

- 新エネルギー・材料の創成 -1139

話題

- 国立七大学総合体育大会 3 連覇.....1140

- 近畿地区国立大学体育大会.....1141

お知らせ

農学研究科附属演習林上賀茂試験地一般公開

- 自然観察会「晩秋の里山を楽しもう」.....1142

- 編集後記1142



『京都大学百年史』全 7 冊他 - 関連記事本文1132ページ -

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

全学シンポジウム「京都大学における教育評価(授業評価・成績評価等)の在り方」の開催

第5回の教育に関する全学シンポジウムが、8月31日・9月1日の両日にわたって、大津プリンスホテルで開催され、長尾 真総長はじめ教職員178人が参加して熱心な討論が行われた。

今回のテーマは、昨年のシンポジウムで「教育評価」がとりあげられたことを受けて、それを本学の教育のなかでどのように位置付けて具体化していくかを考えるために「京都大学における教育評価(授業評価・成績評価等)の在り方」として設定された。

第1日午後には、大学評価・学位授与機構の大塚雄作教授による基調講演「大学における教育評価の在り方」のあと、パネル報告・討論が行われた。工学研究科荒木光彦教授は、工学部生に対するアンケートによる「教育評価」をファカルティ・ディベロップメント(FD)に結びつけるために行われたディベート形式の検討会を紹介した。人間・環境学研究科前川 寛教授は、全学共通科目「物理学実験」を担当する教官グループが、履修学生へのアンケート調査をもとに実験テーマや指導法、更に設備の改善を行った経過を説明した。高等教育教授システム開発センター藤岡完治教授は、昨年1年間の授業観察プロジェクトを総括して、創意工夫のある多様な授業が本学でも決して少なくないことを強調した。コーディネーターの同センター田中毎実教授は、本学のすみずみで取り組まれている授業改善の活動と経験を結び付けていくことが必要であると論じた。



夕食後には、「文系から見た全学共通科目の教育の現状」、「理系から見た人文・社会・外国語教育の在り方」、「学生による教育評価」、そして「ファカルティ・ディベロップメントの在り方」の4班にわかれたイブニング・ディスカッションが行われた。翌日の全体会議の討論は、このイブニング・ディスカッションの議論の要約からスタートし、学生指導の在り方、教育と研究の関連、教育評価の多面的な在り方について多様で率直な討論が行われた。

今回のシンポジウムは、外には、国立大学改編の動きが進展し、教育を含む大学評価が問題になってきた中で、また内には、全学共通科目のセメスター制への移行も予定されるという情勢の中で行われた。それに対応して、議論の内容も昨年以上に具体的なものになった。このシンポジウムをきっかけに、本学にふさわしい教育評価の在り方が多様な創意とともに育つことが期待される。

『京都大学百年史』刊行事業の終了

本年8月に、『京都大学百年史』資料編三が刊行されました。これにより、平成2年9月の百年史編集委員会発足以来11年にわたって続けられてきた『京都大学百年史』の刊行は終了したことになります。この間、百年史編集委員会は、『京都大学百年史』部局史編一～三(平成9年)、総説編(平成10年)、資料編一(平成11年)、資料編二(平成12年)、そして今回の資料編三の合計7冊を刊行してきました。

た。

総説編は、京都大学全体の制度や組織の変遷、重要な事件などについて総括的に記述し、部局史編は、各部局の設置以来の独自の歴史や学術研究の変遷などについて記しています。また、資料編は制度、組織、様々な出来事に関する史料を収録したほか、講座や研究部門の沿革図、主要な人事の一覧、学生数や経費の変遷、年表などを載せています。このよう

に、各編それぞれの視点で京大の創立前史である明治2年の舎密局^{せいみきょく}の開講から、現在の大学改革に至るまでの歴史をまとめています。7冊合計で8,022頁に及ぶ大部なものとなりました。

このほか、百年史編集委員会は京都大学の歴史を写真、図版などで表した『京都大学百年史 写真集』（平成9年）、簡単な歴史と身近な話題を綴った小冊子『京大百年』（平成9年）も刊行しました。

編集にあたっては、学内外の様々な個人・機関からのご協力をいただきました。特に多くの貴重な文書や写真といった資料を提供いただき、それによって今回初めて分かった事実もありました。例えば、初代総長の関係資料からは、京大が創立するまでには複数の創立計画案が文部省で作成されており、その中には第三高等学校を改編して京都帝国大学とするという案もあったこととか、模擬店・余興・時代劇や漫才など現在の学園祭のルーツといってもよい園遊会が昭和初期から行われていた事実が学生の親睦機関の史料から分かったことなど、いろいろと挙げられます。百年史のような大学の沿革史は、近年では資料に基づき学術的批判にも堪えるようなものを刊行することが常識になりつつあります。『京

都大学百年史』もそのような刊行物として位置づけられることを目指して編集してきました。

編集の過程で収集した資料は、昨年11月に新設された大学文書館に引き継がれることになりました。大学文書館では、今後も京都大学の歴史に関する様々な資料を収集し、その資料に基づいた研究・教育を展開していくことになっています。歴史の編纂は、一度の沿革史の刊行で終わりとするのではなく、作業を継続的に行っていくことが重要と考えられます。大学文書館にも、より一層のご協力をいただきますよう、お願い申し上げます。

（百年史編集委員会）

* 『京都大学百年史』総説編、部局史編、資料編一・二、および『京都大学百年史 写真集』はインターネット上でも公開しています。京都大学附属図書館のトップページから「電子図書館」の「電子化テキスト」へアクセスしていただけますと閲覧できます。なお、資料編三も近日公開予定です。

* * 『京都大学百年史』総説編の正誤表を作成しました。平成10年に総説編をお配りした方に配布いたしましたが、お手元に届いていない場合は、お手数ですが百年史編集史料室（内2651、2625）までご連絡ください。

部局の動き

国際融合創造センターオフィス開設

本年4月発足した国際融合創造センターは、このほど工学部4号館内に研究室などが整備されたことに伴い、8月24日（金）に銘板の上掲式とオフィスの披露を行った。

工学部4号館南玄関で、副学長、総長補佐、関係教職員など多数が見守る中、長尾 真総長と松重和美国国際融合創造センター長による銘板の上掲が行われ、引き続き、完成したオフィスが出席者に披露された。同センターでは今後、このオフィスを拠点に、企業との共同研究の締結や市民から研究テーマを募集する「研究講」などの事業を、活発に展開していくこととしている。

披露式終了後行われた懇親会では、松重センター



長の挨拶、長尾総長の祝辞があり、赤岡 功副学長の発声で乾杯し、なごやかな雰囲気の中で新オフィスの完成を祝った。

（国際融合創造センター）

訃報

このたび、小葉田 淳^{おはた あつし}名誉教授、伊谷純一郎^{いたにじゅんいちろう}名誉教授、桑原道義^{くわはらみちよし}名誉教授が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

小葉田 淳 名誉教授



小葉田淳先生は、8月8日逝去された。享年96。

先生は、昭和3年京都帝国大学文学部史学科を卒業後、同大学院に進学し、その後台北帝国大学文政学部講師、同助教授、国立台湾大学副教授、東京文理科大学文学部教授を経て、同24年京都大学文学部教授に就任、国史学第一講座を担当された。昭和44年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、龍谷大学文学部教授、京都女子大学文学部教授、時雨亭文庫常務理事、住友史料館長等を務められた。

先生は、終始一貫して日本史学、殊に対外交渉史および日本鉱山史の研究に専念し、単に日本語史料のみならず、広く中国・朝鮮・沖縄の文献にも通曉され、更に農山漁村に埋もれた古文書・古記録を発掘し、これらを通じて実証的研究を進め、常に清新な研究を学界に送り続けられた。『日本鉱山史の研究』は代表的著作であり、昭和44年日本学士院賞が贈られた。

これら一連の功績により、昭和50年11月勲二等瑞宝章を受けられ、同51年日本学士院会員に選ばれた。また、平成8年文化功労者の栄誉を受けられた。

(大学院文学研究科)

伊谷 純一郎 名誉教授



伊谷純一郎先生は、8月19日逝去された。享年75。

先生は、昭和26年京都大学理学部動物学科を卒業後、日本モンキーセンター専任研究員、京都大学理学部動物学科自然人類学講座助教授を経て、同56年同学科人類進化論講座の教授に就任された。昭和61年京都大学アフリカ地域研究センターの新設に伴い、同センター教授に配置換えとなり、初代センター長に就任された。平成2年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、平成2年から同9年まで神戸学院大学人文学部教授を務められた。

先生は、日本における人類学・霊長類学およびアフリカ地域研究の創始者、開拓者であり、霊長類研究では、「餌付け」「個体識別」「長期継続研究」と

いった画期的な視点を導入し、現在国際的に重要な位置を占める日本の霊長類学の礎を築いた。また、アフリカの自然に強く依存して生活する狩猟採集民・農耕民・牧畜民についての生態人類学調査を主導され、同地域の自然・人・文化の相互関係を深く洞察された。日本アフリカ学会、日本霊長類学会の創設に力を尽くされ、これらの学会において会長等の要職を歴任された。

これら一連の功績により、昭和44年朝日賞、同59年人類学のノーベル賞ともいわれる英国王立人類学研究所のハクスレー記念賞、平成3年大同生命地域研究賞をはじめとする多くの賞を受けられた。また、平成4年には紫綬褒章、同9年11月には勲三等瑞宝章を受けられた。

(大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

桑原 道義 名誉教授

桑原道義先生は、8月21日逝去された。享年77。

先生は、昭和23年京都大学工学部電気工学科を卒業後、同大学工学部副手、助手、講師、助教授を経て、同39年工学部附属オートメーション研究施設教授に就任、電子材料および回路素子部門を担当された。昭和62年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、大阪産業大学教授を務められ、昭和62年から6年間同大学学長を務められた。

先生は、昭和34年のオートメーション研究施設の創設時より同研究施設の発展につくされ、数多くの成果を世に出してこられた。前半は自動制御における非線形振動や摩擦、安定問題などの研究を中心に、

後半は医用工学に関連して医学と工学との境界研究を先頭に立って展開され、シミュレーション技術を駆使した臨床データ解析システムの作成など医療分野への工学技術の利用に大きな貢献をなされた。さらに、心臓画像を中心とする医用画像処理の研究においては、先進的な研究成果を次々と発表され、国内外での当該分野の研究発展に多大の寄与をされた。

また、日本自動制御協会（現システム制御情報学会）会長、計測制御学会および日本 ME 学会副会長、日本医用画像工学会会長等を歴任され、我が国の学術の振興に多大の貢献をされた。

これら一連の功績により、平成11年11月勲二等瑞宝章を受けられた。

（大学院工学研究科）

日誌

2001.8.1 ~ 8.31

8月24日 発明審議会

31日 全学シンポジウム（9月1日まで）

文化交流

留学大国アメリカ 大学職員としての体験

大嶋 三奈子

私は平成12年6月から、文部科学省国際教育交流担当職員長期研修プログラムに参加する機会を得て、アメリカ合衆国モンタナ州とイリノイ州で、計1年間を過ごすことができました。このプログラムは、日本の国立大学職員の英語力の向上と、米国の学生・研究者交流制度の理解を目的とした海外研修制度です。

研修前半は、ロッキー山脈に抱かれたモンタナ州立大学（MSU）で、英会話力やビジネス英語力向上のための語学研修と、留学生の受入・派遣や大学間国際交流に関する講義を受けました。また、国際交流オフィスにある海外留学情報センターで、インターンシップをしたり、教育改善のためのニーズ調査方法や、高等教育に関する法律の授業も聴講しました。

年明け後の研修後半は、寒風吹き付ける平原に囲まれた、州立北イリノイ大学（NIU）の国際交流課で実務研修を行いました。ここでは、大学の全教官の海外渡航経験や外国語能力、国際交流への積極性に関する調査の準備と、留学生課の外部評価の一環である、留学生の満足度アンケートの集計などに携わりました。NIUの国際交流課では、他の課や他大学の国際交流課、地域社会などとの共同プロジェクトも行っていて、学内外との連携の強さを感じました。

大学での研修の他、研修旅行の一つとして、ワシントンDCの教育省や非営利団体（NPO）を訪問する機会もあり、中央集権化された日本とは違って、大学の外部評価や留学生交流などにおけるNPOの



モンタナ州立大学

役割の重要性を認識することができました。

研修中には、米国の大学の興味深い特徴にも何点か気が付きました。1点目は学生へのサービスが大学経営の中心である点です。学外から公募した副学長候補者と学生との公開討論会や、留学生と米国人学生も委員となっている国際交流委員会などはその現れだと言えます。

2点目は大学の経営的視点です。州立大学でも、教育・研究と直接関わりのない、劇場や寮などの施設は独立採算であり、また留学生課では、留学生を大学の重要な財源と捉えていたり、参加料をとって大学が実施する海外留学制度もあり、その利益は更なる学生交流促進のために使われていました。

この他にも、事務職員が大学院に通う例が少なくないなど、日本の大学との違いに驚くことが数多くありました。

この研修を通して、様々な貴重な経験をすることができましたが、何よりも現地で広がった人間関係が自分の財産となるはずです。自分の国と自分の勤務する大学を考え直す機会を持つことができたことを、非常に感謝しています。

（おおしま みなこ 研究協力部国際交流課）



聴講した大学院授業の教官・クラスメートと

随想

京大と音楽

名誉教授 嶋原 眞一

京大オケの腕前は学生団体としてはトップレベルである。同世代集合体のアンサンブルのよさは抜群で、リズムの統一、ハーモニーの精度など、プロのオケをはるかに超える。曲の解釈も知的な読みを鋭敏な感性で捉えて、表現力では技術的に完成度の高い音大系のオケを凌駕する。



大阪フィルを率いる朝比奈 隆が大先輩だとあれば、当然のようにも思えるが、音楽専攻でもない学生の課外活動としては驚異である。もちろん年二回の公演に集中するわけだから、数回のリハーサルで本番を迎えるプロのオケとは練習量がちがう。最近では女子大系の助っ人も増えたようだが、それにしても理系も多い学生集団の集中度は京大生の偉大な潜在力を感じさせる。河合隼雄のフルートやモーツァルト室内オケの門 良一などはこの系譜で、いうなれば器楽派である。

もう一つ、旧教養部の北隅に音研の部室があり、こちらは声楽系の人間が集まっていた。同世代の原田茂生はバリトンで工学部の学生だったが、卒業後東京芸大を受け、ついには音楽学部長になった。最近話題の堺シティーオペラのマネジャー益子 務もその一人である。

私は高校では音楽部でコーラスを歌っていたが、京大ではどこにも属さず、聴く側にまわっていた。当時の中西信太郎英文科主任教授の講義には「シェイクスピアのソング」があり、歌詞の話が中心だった。あるとき、歌には節がありますが、そちらのほうはどうなっているのでしょうか、と質問したところ、僕はオタマジャクシが苦手なので、君、自分で研究したまえ、ということになった。

そこから私の音楽への深入りが始まる。第一の答案が博士課程終了時の研究発表「柳の歌」でシェイクスピアとリュート・ソングの関係について考えた。音楽熱はさらに高じて、教養部に勤務中には音楽理論を学ぶ必要を感じて、当時の大阪教育大学特設音楽科へ特別研究生として3年通ってシェンベルク「作曲の基礎技法」を、さらに3年私淑してシ

ェンベルク「対位法入門」を指導教授と共読した。今は昔の話である。

専門のアメリカ文学ではエドワード・オールビー全集の後半3巻を同じ頃に翻訳したので、不条理派の前衛きどりに見えたと思うが、不思議な縁は続く。ある外来演奏家のコンサートで、知り合いの作曲家に辛口の批評をしたところ、いっぺん書いてみませんかという話しになり、「京都新聞」の月評欄を輪番で担当することになった。ちょうど二十年前のことである。担当記者の注文は地元の演奏家を中心ということだったが、月に十回くらいの演奏会を定期的に聴くことになった。

演奏会場に足しげく出入りするようになって気付いたのは、当然のことながら先輩・同僚の姿も散見できるということである。特定の演奏家のときに必ず現れる人もあった。たとえば梅原 猛、河野健二、香西 茂から藤家龍雄、田口義弘といった同僚まで、顔ぶれは多彩だったが、関係者が配偶者、子弟など、家族なのだ。現在は「音楽現代」「関西音楽新聞」などにコンサート評を書いているが、友人・知己を批評するのは難しい。しかし自分の直感を信じて言葉を選ぶ以外に書きようはない。最近はコンクールや音楽賞の審査をする機会も増えたが、新しい現象として応募者に人間・環境学研究科の院生を発見することもある。

バーンスタインのハーヴァード大学ノートン・レクチャー「答えのない質問」を私は何度も英語のテキストとして使った。チョムスキーの変形文法を慣用した音楽論は語学と音楽を同時に学べるコースとして京大オケ御用達のようになったが、私がロックフェラーだったら、メセナ活動の一環として、京大に音楽論関係の講座を寄付したいと思う。

(しぎはら しんいち 元総合人間学部教授

平成8年退官、専門は創造行為論 英語)

洛書

後から参加した者の言い分

辻 文三

筆者は6年前に本学に赴任した者で、本稿で述べる内容は、その後の限られた機会と乏しい経験に基づく印象であることを予めお断りしておきます。



本学に着任しての第一印象は、管理運営システムの全貌が極めて分かり難いということでした。着任早々の4月から教室主任を命じられ、様々な問題を処理する必要に迫られましたが、非常に多くの委員会が存在しているにも拘わらず、それらの中には、分掌事項が明記されていないかったり、担当事務が分からなかったり、場合によっては構成委員すら分からないものもありました。また、これらの委員会相互の関係を示す組織図が明確でないため、夫々の委員会の位置付けもどのようになっているのか分からない状態で、これでよく生きていけるものだと感心しましたが、私の周りの先生方は、何の問題もないかのように生き生きと活動しておられ、組織論をあまり具体的に議論しない組織なのだと思います。

第二印象は、教授の場合には、会議に費やされる時間が極めて長いということでした。これは筆者の所属する学科だけの問題かも知れません。筆者の印象では、会議の時間が長いことの原因は、組織としての当面の目標や行動計画を立てていないことによると思います。それがあれば、多くの事柄はその方針に従って僅かな議論で決着し、時間をかけて議論すべき事柄は限られるはずです。しかし意外なことに、多くの先生方は、当面の目標や行動計画を立てることに反対のようで、理由は、様々な約束事に従って行動することは、その時々に応じて最適な解を見出すのに障害となる、とのことのようにでした。既定の方針に従って安心して住める世界ではなく、いつも新たなことを考えることを余儀なくされる組織であると思いました。

第三印象は、教官と事務官の仕事の分担や協力関係が明確でないということでした。明らかに事務官の仕事であると思われる内容を教官が処理していたり、またその逆に遭遇したりしました。ここでも、

組織論をあまり議論しない組織であるとの印象を強くしました。

着任早々に受けたこれらの印象は、「京都大学の自由の学風」に拘束され、狭い道を歩む事を選択した組織である、ということに原因があると思いました。このことを著者は否定的に言っているつもりはありません。日常的には多少不便があっても（不便とすら感じないのかもしれませんが）、いざという時には、本学でなければ提示できないような解を見出し、それが、我国は勿論のこと世界をも変えるきっかけになればよい、という共通認識があるのでしょう。そのためには、細かい規則や約束を定めないうで、フリーハンドを充分に残しておく必要があるということなのでしょう。

近年、我国の大学に対する信頼感が薄れたとして、納税者に対する大学の説明責任や、第三者による大学評価が求められるようになりました。第二次世界大戦後のイデオロギー対立時代には、経済成長を最重要目標として進んできた我国が、ベルリンの壁が崩壊した後の民族や宗教や文化の対立時代に入り、未だにそのスタンスさえ定めきれていないこの時期に、どのような評価軸で大学評価を行おうとしているのか、いささか心配です。

このようなことを考えながら、若い頃に読んだ湯川秀樹の『科学者のこころ』中にでてくる荘子の「混沌」の話を思い出しました。明確な機構を持つような多くの組織と比べて、混沌としたものを大切にする本学に、目鼻等を入れることが、どのような結果を生むことになるのでしょうか。

（つじ ぶんぞう 大学院工学研究科教授）

公開講座

エネルギー科学研究科公開講座
21世紀のエネルギー科学 - 新エネルギー・材料の創成 -

1. 日 時：11月10日（土），17日（土） 午後1時～4時

2. 場 所：工学部物理系校舎

3. 演題及び講師：

21世紀を切り拓くバイオマス資源

教 授 坂 志朗

IT 革命とエネルギー問題

助教授 浜口 智志

機能材料 - ミクロなエネルギー変換 -

教 授 松本 英治

環境にやさしい核エネルギーの実現と材料

教 授 香山 晃

4. 受 講 料：4,800円

5. 申 込 期 間：10月15日（月）～11月2日（金）

6. 問い合わせ先：工学部等総務課庶務掛

TEL：753 - 5000

詳細はエネルギー科学研究科ホームページをご覧ください。

<http://www.energy.kyoto-u.ac.jp/kenkyuka/kokai.html>

話題

国立七大学総合体育大会 3 連覇

第40回国立七大学総合体育大会が本年7月20日（金）の開会式を挟み、昨年12月8日（金）の「アイスホッケー」を皮切りに8月5日（日）の閉会式まで、35競技種目にわたり東京大学の主管で開催された。

本学は、1位種目が昨年を上回る12種目と圧倒的な強さで、2位東北大学に大差をつけて総合優勝を果たした。これで、大会3連覇（通算優勝回数は最多の12回）となり、21世紀最初の優勝校となった。

なお、本大会の成績結果は、次のとおりである。

大学名	北海道大学		東北大学		東京大学		名古屋大学		京都大学		大阪大学		九州大学	
競技名	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点
アイスホッケー	3位	29	7位	1	4位	25	5位	17.5	5位	17.5	2位	30	1位	34
航空（グライダー）			4位	14.5	3位	19	1位	34.3	5位	13.4	2位	28	6位	1.8
馬術	4位	16.5	6位	11.5	2位	23	3位	20.5	1位	25.5			5位	14
ヨット	4位	23.9	6位	16.2	3位	25.9	7位	7.9	5位	22	2位	28.3	1位	29.8
柔道	1位	43	3位	25.5	5位	15	2位	36	3位	25.5	6位	8	7位	1
剣道（男子）	7位	7	3位	29	1位	34	6位	14	4位	22	5位	18	2位	30
〃（女子）	7位	4	2位	30	5位	18	6位	11	1位	43	4位	22	3位	26
水泳	2位	36.5	4位	20.9	6位	10.8	3位	25.8	1位	36.7	5位	17.6	7位	5.7
空手	3位	23	6位	14	2位	36	5位	18	1位	43	7位	1	4位	19
硬式庭球（男子）	3位	29	2位	36	7位	1	5位	15	1位	43	4位	22	6位	8
〃（女子）	5位	15	3位	29	7位	1	2位	36	4位	22	1位	43	6位	8
軟式庭球（男子）	5位	21	3位	29	4位	22	2位	30	6位	8	1位	43	7位	1
〃（女子）	3位	29	4位	22	7位	1	1位	43	5位	15	2位	36	6位	8
バスケットボール（男子）	5位	15	7位	1	3位	35	6位	8	1位	37	4位	22	2位	36
〃（女子）	6位	1	5位	14			4位	15	3位	16	2位	29	1位	36
卓球（男子）	7位	1	6位	8	1位	37	5位	15	2位	36	3位	35	4位	22
〃（女子）			3位	15	1位	29			5位	1	2位	22	4位	8
洋弓	5位	22.7	4位	23.9	3位	26.5	7位	1	2位	31	1位	32.7	6位	16.2
少林寺拳法	7位	1	6位	12.8	3位	29	5位	18.7	1位	37.1	2位	32.3	4位	23.1
陸上（男子）	6位	16.2	4位	21.5	2位	28.5	1位	31.7	3位	26.6	5位	20	7位	9.5
〃（女子）	3位	33.4	5位	10.8	1位	48	2位	40.7	4位	16.6	7位	1	6位	3.5
フェンシング			2位	21	3位	15			1位	24	4位	11	5位	4
ハンドボール	6位	11	4位	16	3位	29	1位	43	5位	15	7位	4	2位	36
硬式野球	5位	15	7位	1	6位	8	4位	22	1位	43	2位	36	3位	29
準硬式野球	5位	15	1位	43	7位	1	6位	8	3位	29	2位	36	4位	22
女子ラクロス	2位	29	4位	18	1位	33	5位	8	6位	1			3位	22
バレーボール（男子）	2位	30	3位	29	5位	21	4位	28	1位	37	7位	1	6位	8
〃（女子）	6位	14	4位	16	7位	1	1位	43	5位	15	3位	29	2位	36
バドミントン（男子）	2位	36	3位	29	5位	15	6位	8	7位	1	4位	22	1位	43
〃（女子）	1位	43	2位	36	4位	16	3位	29	7位	7	6位	8	5位	15
弓術（男子）	3位	29	1位	43	2位	36	5位	15	7位	7	4位	16	6位	8
〃（女子）	4位	22	1位	43	3位	23	5位	21	7位	1	6位	14	2位	30
ゴルフ	7位	1	2位	34.5	5位	7.6	4位	27.1	1位	50	6位	2	3位	31.8
自動車	3位	23.2	5位	17.7	1位	26.8	2位	26.5	7位	3.5	6位	6.2	4位	22.1
体操	4位	25.3	3位	26.4	5位	22.3	6位	14.8	1位	33.7	2位	30.5	7位	1
総合順位	6位		2位		4位		3位		1位		5位		7位	
総合得点	660.7		759.2		719.4		732.5		805.1		706.6		648.5	

近畿地区国立体育大会

本学が当番大学となり開催された第39回近畿地区国立体育大会は、5月13日(日)の「ラグビー」から8月28日(火)の「バレーボール」まで、29競技種目において熱戦が展開された。

本学は、「陸上競技(男子)」及び「テニス(男子)」の種目で優勝し、各競技において健闘したものの総合成績では、男子が4位、女子は10位であった。

なお、本大会の成績結果は、次のとおりである。



得点表(男子)

競技名	滋大	滋医大	京教大	京工大	阪大	大外大	大教大	兵教大	神大	神船大	奈教大	和 大	京 大
陸上競技	4						7		5				10
水泳					5		10		4				7
野球					4.5		7		4.5		10		
軟式野球	5		7					10					4
テニス	4				5				7				10
ソフトテニス			7		4.5				10				4.5
バスケットボール			4		5		10						7
バレーボール			7				10	4.5					4.5
サッカー			7		5		10		4				
ラグビー					4.5		10		4.5				7
卓球	4				10				5			7	
バドミントン			5		7		10						4
柔道					4			5	10			7	
剣道					7		4.5		10				4.5
体操競技							10					5	7
ハンドボール			5		7		10					4	
弓道			5		4				7			10	
計	17	0	47	0	72.5	0	98.5	19.5	71	0	10	33	69.5
順位	8	10	5	10	2	10	1	7	3	10	9	6	4

得点表(女子)

競技名	滋大	滋医大	京教大	京工大	阪大	大外大	大教大	兵教大	神大	神船大	奈教大	奈女大	和 大	京 大
陸上競技			7				10	5	4					
水泳	7		4				10		5					
テニス			10		5	4	7							
ソフトテニス			4.5		7		10	4.5						
バスケットボール			7				10		5					4
バレーボール			7			4.5	10						4.5	
卓球			10				7		5					4
バドミントン			10		5		7		4					
剣道	4.5		7				10		4.5					
体操競技			7				10						5	
ハンドボール			7			4	10						5	
弓道			7	10	4				5					
計	11.5	0	87.5	10	21	12.5	101	9.5	32.5	0	0	0	14.5	8
順位	7	11	2	8	4	6	1	9	3	11	11	11	5	10

お知らせ

農学研究科附属演習林上賀茂試験地 一般公開自然観察会「晩秋の里山を楽しもう」

1. 日 時：11月24日（土）10時～15時（雨天決行）
2. 場 所：農学研究科附属演習林上賀茂試験地
3. 演 題：山を楽しく歩くためのマメ知識
山を歩いてみよう，何があるだろう（試験地内見学）
小さな自然の恵みを変身させてみよう
4. 講 師：助教授 柴田 昌三，助手 中西 麻美
京都精華大学人文学部教授 板倉 豊
夙川女学院短期大学助教授 片山 雅男
5. 参 加 費：無料
6. 申込締切日：10月26日（金）必着
7. 問い合わせ先：農学研究科附属演習林上賀茂試験地 TEL 781-2404
詳細は農学研究科附属演習林上賀茂試験地ホームページをご覧ください。
<http://p1unris.kais.kyoto-u.ac.jp/kami/koukai.html>

編集後記

部会長がイタリアに1カ月間遊学されたため，留守居役の私が10月号の編集のお世話をしました。普段はただ部会長に相槌を打っておればよいと暢気に構えていたのですが，いざ真剣に編集を担当してみるとS先生のご苦労が偲ばれました。今年の4月以来の新しい編集委員による活発なる討論の結果を踏まえて，多少なりとも皆様の知的好奇心を呼び起こし大脳新皮質に刺激を与えるような内容にしたい，と苦心いたしました。前号の編集後記にもありましたOB欄新設の準備も着々と進んでおりますから，「この人ならば」，と思われる先輩をどしどし広報委員会にご推薦ください。（河野記）